

大塚 敬節
矢数 道明

責任編集

世
近
漢方醫學書集成

31
村井琴山一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 31

村井琴山(一)

第11期
全30卷

昭和五十六年一月二十三日 発行

編者

大塚敬節
矢数道明

発行者

中村安孝

発行所

株式会社
名著出版

東京都文京区小石川三ノ木五
電話東京(八二五)一二七〇番代
振替口座 東京七一一〇七四番

製版所

株式会社
日本写真製版社

印刷所

有限会社
伊藤印刷

製本所

辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫



村井琴山肖像

凡 例

- 一、本書第三十一卷「村井琴山(-)」には、『医道二千年眼目編』卷之一―卷之六までを収録した。
- 二、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。
 - ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。
- 三、底本は次の通りである。

医道二千年眼目編 版本(文政十一年版) 十三卷十四冊(矢数道明所蔵)

- 一、解説は大塚恭男(北里研究所附属東洋医学総合研究所研究部長)が執筆した。
- 二、巻頭の村井琴山肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』(昭和十一年、刀江書院)によった。

村井琴山

大塚恭男

出自と略歴

村井琴山は父村井見朴の長男として享保一八年（一七三三）肥後熊本の古町新鍛冶屋町に生まれた。名は杵、字は大年、通称は椿寿、琴山はその号である。別に原診館、六清真人、清福道人とも称した。豪傑肌の人で細事に拘泥することなく、容貌もまた魁偉で口唇がすこぶる厚かったと伝えられている。

村井家の初代は琴山の祖父知安である。知安はもと林田姓で、林田氏は肥後の名家菊池氏から分かれた。すなわち、菊池氏第二十五世武包の代に至って屋形断絶したので播州林田村に出奔し、

その長男は戦死し、次男能次が出生の地林田をとつて姓としたのである。能次は大永中（一五二一—二八）に再び肥後に戻り、加藤清正に仕えて飽田郡本部で二千石を領したが、加藤氏の移封後は退いて木部の農民として隠れたという。知安は能次六世の孫で、長じて江見栢の贅婿となり、江氏の一族である村井姓を冒した。知安は原田宗意に医を学び、のち熊本に移つて古町新鍛冶屋町に居を卜して、医を業とするに至つた。

琴山の父見朴は同所で元禄一五年（一七〇二）四月一日に生まれた。十一歳で詩を僧湛堂に学び、文章をよくし、ついで佐藤固庵、熊谷竹堂など多くの東肥の名士に師事し、あるいは交友をもつた。医術は父の知安に学び、頗る好學で、また仁術に徹していたという。延享三年（一七四六）西海道巡見副使夏目氏が薩摩で発病した時、肥後藩は隣藩の礼として医師を派遣することとなつたが、官医にその人を得なかつたため一町医の見朴が選ばれてその任にあたつた。この時以来見朴の医名は高まつたが、さらに同五年（一七四八）には藩侯の病氣を診て本復させたのでその信任は一層厚くなつた。しかし、不幸にして、宝暦元年（一七五一）に眼を患つて失明するに至つた。琴山はこの間の事情を次のように述べている。「先君子五十ニシテ明ヲ喪ス。落々トシテ徒ニ時日ヲ送ルノミ。余小子常ニ側ニ侍シテ湯藥ニ事フ。嘗テ小子ニイヘラク。人ノ世ニアル。空ク飲食スルコトナカルベシ。吾レ医ヲ学ンデヨリコノカタ、霜雪風雨ヲ避ケズ。遠近ノ求メニ応ジテ病家ニ趨ルコト駕ヲ待スシテ往ク。吾レ病ニ臥シテヨリ世ノ補ニナルコト能ハス。我

カ明ヲ喪フヨリモ疚メリ。又人ノ疾苦ヲモ救フ能ハス。コレ吾カ憂ナリ」。

見朴は既に元文中（一七三六〜四一）より私塾復陽洞を開いて門人の育成にあたっており、宝暦初年までに教えを得た塾生は七十一人に達していた。明を喪った見朴は余後の生涯を専ら門人の教育にあてることとなる。

偶々宝暦六年（一七五六）藩において医学校再春館創設の議がおこり、ここに見朴は推されて医学教授となる。再春館が創設されると見朴の私塾復陽洞の塾生はすべて師とともに再春館に入學する。そして見朴は宝暦十一年（一七六一）に没する。琴山はこの時二十九歳であり、すでに学識高く、見朴の在職中はよく父を助けて講席に上り、執読を助けたという。しかし、琴山は助講の合志杏庵と説が合わず、父見朴の没後助講に推されたが固辞して再春館を去り、再び復陽洞を興した。そして、復陽洞は寛政十年（一七九八）原診館と改称される。

ここに更に見朴について附言しておきたいのは、彼が香川修庵に私淑していたことである。見朴が修庵におくった書簡の中には、「不佞朴ノ如キ復タ狂愚ナリト雖モ、夙ニ足下ノ風ヲ聞キテ私窃ニ之ヲ慕ヒ、医事ヲ論スル毎ニ未タ嘗テ東向跂望シテ、先生足下ヲ之レ揚言セズンバアラス、然レドモ門ニ侍望ノ老アレバ、笈ヲ負ヒ遠ク遊ンデ平生ヲ談ズルコトヲ得ザルハ実ニ憾トスベキノミ云々」とあり、彼の古医方への親炙をうかがわせるが、このことが恐らく琴山の後年の東洞への傾倒と無関係ではあるまいと思われるのである。

さて、再春館を去った琴山は初め山脇東洋に、そして遂に終生の師吉益東洞にめぐりあうことになるのであるが、その古医方への傾斜は更に古く十代後半より二十代前半にまで遡ることができる。『医道二千年眼目編・自序』の中で琴山は次のように述べている。「余十八ノ年、今医氏ノ術ニ疑アリ、二十二ノ年、医断ヲ得テコレヲ読ム。我が医学ニ於ケル又大ニ疑アラサルコトナキコトヲ得ンヤ。此ノ二ツノ大ヒナル疑アルヲ以テ且ツ迷ヒ且ツ惑ハザルコトナシ。是ニ於テ又再ビ医断ヲ執ツテコレヲ読ム。益以テ大疑城ヲ築キナス……」。

琴山は宝暦九年（一七五九）に山脇東洋に書簡を出す。「我が藩三千医人アリテ一人ノ医人ナシ。医人ナキニアラズ真医ナキナリ」と。その後、東洋と書簡の往来があり、東洋も琴山の才能を愛したが、三年後の宝暦一二年に東洋は没する。その後、程なくして琴山は京都に行き、嘗て『医断』で識った吉益東洞を訪ねて、古疾医の道を聞き、「十数年ノ一大疑城釈然トシテ氷ノ日ヲ得テ解クルガゴトシ」と感激し、ただちに師事することを決意する。琴山が東洞のもとで直接に指導を受けたのは数ヵ月間で、その後帰国し、数年間は熊本で医業に、また教育に従事していたが、明和六年（一七六九）に再び上京して東洞に師事した。東洞は琴山の才能を高く評価し、京都を去る時は自ら淀口まで送り、「吾道ノ寄、関ヨリ以西、一二以テ君ニ委ス」との激励の辞を与えたという。帰郷後は『傷寒論』を講読して後進の指導に当たったが、講説が巧みであるとともに、屢々人を面罵することがあった。琴山は東洞流の攻撃的療法を得意としたので、世間に容易に受

け入れられず、患者も少なかったが、中年になってからは医名が急に上がり、遠近を問わず多くの患者が治を乞うようになった。五十歳を越えてから漸く十口糧を藩から賜わり、その後数年してまた禄百石を賜わり医員に列せられた。老人になって禄を辞すことを申し述べたが許されず、逆に匙医に列せられて更に五十石加俸された。その後まもなく致仕し、文化一二年（一八一五）三月一日病没している。

なお琴山の雅号に関連するが、琴山は少年の頃より箏、琵琶を学び、中年に至って七絃琴を弾いたという。琴を愛したことから琴山の号を得たと推察されており、龍野一雄氏は琴山に『琴山琴録』三卷（文化三年刊）の著述のあることを明らかにしている。

琴山の弟通禎もまた医を以て名を成した。通禎は字を子幹といい、宇土の医家帆足氏の養子となり、帆足氏を称した。少年の頃は政治を志していたが、父見朴と兄琴山の説得によって翻意して医を志したという。江戸に行き原南陽や岑少翁と相識り、吉益東洞の説を聞き感銘し、帰郷の途次京都によって東洞を訪ね、教えを受けた。以後兄弟が切磋琢磨して肥後の医学の向上に努めた。通禎は良医であるとともに藩政の顧問に応じ、その没した時は「国医が亡くなってしまった」と老臣に嘆かれたと言う。

琴山の学風と業績

琴山は『医道二千年眼目編』の中で次のように述べている。「元禄享保ノ際ニ當ツテ艮山後藤先生始メテ古方ヲ唱フノ称アリ。ソノ説医家ノイマダ聞カザルノ言アリ。海内ノ人ノ耳目ヲ新ニス。繼ヒデ起ルモノ、ソノ門人香川山脇ノ二氏アリ。ミナ艮山ノ故轍ヲ踏ンデ一二ノ同異アリトイヘドモ亦五十歩百歩ノ間アルノミ。我ガ東洞翁ニ至ツテ純一ニ仲景ノ方法ニ依循シテ自ラ古疾医ノ道ト称ス。越人ノ言ニ取り、仲景ノ術ニ拠リ、古今ヲ斟酌シテ二千年來ノ眼目ヲ開ク。中華トイヘドモイマダコレヲ聞カザルノ説ナリ。コレ乃余ガ主張シテ一二東洞ニ依循シコレヲ拡充スル所ノモノコレナリ」。

琴山の父見朴は夙に香川修庵に私淑した。琴山自身も先ず山脇東洋に師事する意志があつたが、たまたま東洋が病没したため吉益東洞に師事するに至つたいきさつは既述した通りである。これを見れば、琴山父子はともに古医方に親近感をもつたことはあきらかであるが、琴山が東洞に師事するにあたつては偶然的な要素が介在していたようである。

しかし縁あつて東洞に師事してからというものは世話にいう「うまがあつた」というか、東洞の人間的魅力がしからしめたものか、琴山は東洞門下中でも最も忠実な門人として終世変わるこ

とがなかった。『眼目編・自序』には「先師涙シテ余ヲ送ル……小子鈍謹ンテ先師ノ命ヲ奉シテ、泣
ヒテソノ膝下ヲ辞ス」と今様な見方からすれば些か大時代な表現で師弟の情を伝えているが、東
洞が一癖も二癖もある人物であったのに対し、琴山はいわば直情径行の人であったと思われる。

『医道二千年眼目編』は壮大な東洞讃美の書であり、片言隻句と雖も東洞に対する批判の語はも
らしていない。

琴山の親友であった筑前の亀井南冥は東洞をして「隠として一敵国の如きものはこれ朝陽か」と嘆ぜしめた永富独嘯庵の高弟であった。独嘯庵は山脇東洋の門に学んだ人で、数ある古方の英才の中でも、もっともとらわれない見方をした人であり、南冥もその学風を受けついでいる。南冥は東洞を畏敬はしていたが、また手きびしく批判もした。しかも琴山・南冥の交流はきわめて深く、「筑に道載あり、肥に椿寿あり」と併称されて、一時代の九州の医学とともに担った間柄であった。その南冥がある時、次の一律を作つて琴山に示したという。「東洞先生老学医 経方祖述漢張機 星霜七十窮愈々固 弟子三千信且疑 万病有源唯一毒 私言雖好奈公議 英雄心事深堪憫 目睫依然鸞鳳姿」がそれだが、琴山はただちに、筆をとつて、老学を唱疾に、星霜を春秋に、且を不に、有を無に、私を公に、雖好を有徴に、奈公を勿私に、深堪憫を都如此に訂正したという。

琴山の医療の実際については詳らかではないが、東洞流の古方を柱としつつも、また一面、『和

方一千方』の述作が示すように、かなり自由に経方、奇方を駆使したのではなかったかと思う。この意味では、葛洪、後藤良山の系列につながるとも言える。

琴山のいま一つの大きな業績は医人の育成のそれである。家塾復陽洞のち原診館の管理はいうまでもなく、藩学再春館の創設に当っても失明した父見朴を助けて大きな功労があった。『原診館塾生名籍』は宝暦十一年（一七六一）より文化六年（一八〇九）に至る間の塾生三二七人を載せており、内訳は肥後藩七九人のほか九州各地はもとより、遠く京都、江戸、奥羽の諸地域に及んでいる。

琴山の著書はきわめて多い。本集成に採録した『医道二千年眼目編』、『和方一千方』の二大著作のほかに、『東洞先師三書刪定』、『方極刪定』、『方極刪定考徴』、『類聚方刪定』、『読類聚方』、『類聚方存疑方補緯』、『藥徴考訂』、『藥徴続編』、『藥徴続編附録』、『診余漫録』、『診余漫録外篇』、『診余隨筆』、『聚毒編』、『塾中雜記』、『仏氏不可恐藥說』、『痘瘡問答』、『白酒』、『古方』、『痘訣』、『方法略』、『原診館七則解』、『論儒医言』、『藥量考』、『藥性歌附余』などで、ほかに医学関係以外の著作がある。

『医道二千年眼目編』

琴山の主著の一つで、文化九年（一八一二）に初めて刊行された。筆者は文化九年本、文政十一年本と、奥付欠除本の三本を披閲し得たが、このうち文政十一年本には「医道二千年眼目編自

序」が巻頭に載せられており、他の二本はこれを欠いている。自序中に「余也今七十有七」とあることより、これが文化六年（一八〇九）に書かれたことが分る。どうしてこの自序が文化九年本に採録されなかったかは不詳である。

本書は右自序について、本文が十三巻に分載されている。巻一 殷医、周医。巻二 扁鵲附考。巻三 春秋医。巻四 漢医、素問、九靈。巻五 本草。巻六 傷寒雜病論、金匱要略。巻七 傷寒論取舍一。巻八 傷寒論取舍二。巻九 張仲景。巻十 類聚方。巻十一 方極。巻十二 葉徵、司命。巻十三 万病一毒らがそれぞれである。

内容については既述したように東洞説の補強、立証を主旨としたもので、琴山の独創的な見解は殆どみられないが、琴山の性格、性情が行間に溢れていて、やはり彼の代表作の一たるを失なわない。

『和方一千方』

『和方一千方』には板本はない。本書の底本は大塚敬節氏蔵の『和方一千方』前編の写本であり、天明元年（一七八五）三月の記載のある自序、享和二年（一八〇二）八月の記載のある凡例を含む本文四十一巻からなり、巻末に「黒ヤキノ法」、「癘病治法印施」を附録として附し、享和三年（一八〇三）の日付が記されている。

凡例にみられるように、本書は延享二年（一七四五）琴山十三歳の時に着手し、前編五千方、

後編五千方で計一萬方の採録を意図したのだが、安永七年（一七七八）秋の火災のために原稿の三分の二を失ったため、とりあえず前編のみをまとめたもので、後編は遂に完成をみなかった。民間薬の集成としてきわめて貴重なもので、実用的な面からも、民俗学ないしは民族学的な資料としても注目に値しよう。

〔参考文献〕

- | | | | |
|------|---------|---------|------|
| 山崎正董 | 肥後医育史 | 鎮西医海時報社 | 昭和四年 |
| 山崎正董 | 肥後医育史補緯 | 鎮西医海時報社 | 昭和六年 |
| 竹岡友三 | 医家人名辞書 | 南江堂 | 昭和六年 |

村
井
琴
山